

# 新島襄ノト

— 徳富蘇峰の新島像 —

露 口 卓 也

九八

1

新島襄は自分を語る人というよりも、他の人から語られる人であった。同志社の創立者という地位がおのずからそうさせるのだが、より本質的には新島の生きるスタンスにそれは関連していた。

現在刊行中の新島襄全集の編目をみると、全十巻の内訳は書簡四巻（うち英文、来簡各一）、日記・紀行二巻（うち英文一）、教育一卷、宗教一卷、補遺・雑纂一卷、それにA・S・ハーディ著の伝記一卷となっている。書簡の分量の多いこと、教育や宗教編などに収載されている文章に断片、メモ、草稿の類が少なくないこと、同志社に関わるものが多いことといった特徴を指摘することができ、それは著作でもって自己の所信を世に問うことよりも、関係者にむけて語りかけるのを重じていたことを示しているように思われる。その文章は実践、実務の文章であった。

幕末に単身脱国し、十年にもわたる海外生活を経験、その間にアーモスト大学などで新知識を身に付けた人物が、その体験と知識とをもって当時の日本に示しうることは多々あったし、またそれが一

般の人たちの関心を集めることもできたであろう。新島は帰国後、大小の集まりでよく語ったし、その知見を語る機会も少なくなかった。にもかかわらず新島はまとまった著作を残していない。

J・D・デイウィス著『新島襄の生涯』に同志社設立まもない頃、日本のある高官から寄せられた書簡とそれに対する新島の返事の一節が紹介されている。その高官にいわく、「あなたは知識があり、知恵があり、しかもあなたはまだ若い。しかるに一体どうしてあなたは京都にすつこんで、若い男女学生とのんびり時を費やしておられるのですか？ それは恐らくあなたが宗教に熱心だからでありましょう。しかし何故あなたは偉大な公の人となつて、あなたの影響力をこの世に及ぼそうとなさらないのですか？」と。答えて新島いわく、「ご親切なご忠告ありがとうございます。しかし私が政府の役職につけば、どれだけの利益を日本に与えることができるでしょうか？ ごく僅かなものにきまっています。逆に、もし私がこの山紫水明の地において多くの若い男女を教育し、日本のために働くことのできる何百、何千の新島を生み出すことができるとすれば、それはちょっとした益であるかもしれませんが、実はこれが私の

人生の目的なのです」と。これは新島が世の中の一般にむけて語るよりも、教育事業のなかで周辺の人たちに語りかける方が大切だという所信を述べたものである。高官が鋭角的に時代と切り結ぼうとしているのに対し、新島はより緩やかに人間主義的に立ち向うているといえるだろうか。新島の表現は言論よりも直接話法の方に重心がおかれる。

「ごく最近『天に召された』われわれの兄弟の生涯と性格と事業とはめざましいものであり、独得なものであった。彼は生涯の大部分を京都で、われわれのまん中で、すごした。十四年間にわたって彼と親交を結ぶ機会を与えられたことは私の特権であった」と述べたのはJ・D・デイヴィスである。同志社創業以前から外国人宣教師のなかで新島のもっとも良き理解者であり協力者であったデイヴィスのこの言葉は多少の身びいきも手伝ってはいるだろうが、その贅辞が決して伊達でないのは歿後すぐに新島伝を書き上げたことからだけでも分かる。親近した外国人宣教師からその生涯と性格と事業に個性が見い出され、その人と知り合ったことに特権を自覚させるようなところに新島はいた。こういう人物を言論を主とした思想史上に意味づけることはやはり難しい。

## 2

新島を語った人たちの一人に蘇峰徳富猪一郎がいる。実際に新島を知る人で新島を語った人は多いが、蘇峰ほど熱烈に語った人もめずらしい。新島と初めて会った明治九年、十四歳のときから亡くなる昭和三十二年、九十五歳まで蘇峰は新島を師として敬愛しつづけた。

また新島を語りつづけた。新島が大磯の客舎で生涯を閉じたときには「吾人は今、父とも師とも、力とも、光明とも仰く処の新島先生を喪へり」と痛嘆し、その後も、若王子の墓所に詣しては「予は吾が父以外には、個人として、先生に負ふ所、最も多大と思ふ。親炙したのは、四年に満たず、然もそれが殺風景に終つたが。学校を出てから、頓に先生を思慕する様になつた。而して今尚ほ、思慕の情に勝へぬのである」と述懐し、その忌日には「誰しも年齢と共に、其の接触したる、若しくは私淑したる人の相庭が高下するものだ。年少気鋭の際には、崇拜したる人も。老大となりては、頓に其の興味と、愛著とが消失するものがある。されど新島先生の如きは、今にも記者の胸中に生きてゐる。記者には先生は、到底故人とは思へない」とその存在感の確かさを自覚するのであった。昭和十年に刊行された『蘇峰自伝』（以下、『自伝』と略）では「予は同志社に在学中、まだ一回も新島先生其人に対して不平を抱いた事は無つた。正直にいへば予は新島先生に於て先生らしき先生を見出したのであつた。（略）予は自ら先生の如き人に会うたのを幸福とするものである。予は自ら先生を訪ねて、京都に赴いたことを、予の生涯に於て、最も幸福なる一と信じてゐる」と回顧され、昭和十九年に刊行された『蘇翁感銘録』では「自分の八十二年の永き生涯に、真にわが師として念頭に離れざる人は唯一人、それは新島先生である。（略）その時、その場合その場合に、孔子のいはゆる『三人行へば必ず我が師アリ』といふ言葉通りに、師という文字を使用して差支へない人は山ほどある。しかし一生を通じて真にわが師と思ひ、今日に至るまで猶ほ思慕する能はざるは新島先生である」と

結着づけられている。

このように蘇峰の新島思慕の情は篤い。しかもその思慕の情はたんなる追慕、追慕でなくして蘇峰が自身を今もなお問いつづけているような生々としたものであった。個人としてとか胸中に活きるとか先生らしき先生あるいは、生の師という言葉にうかがうことができるのだが、それは新島が人間として蘇峰に訴える存在としてあったからではなからうか。

筆者は毎日此の朝礼に出席することを大なる楽しみとした。それは近くに新島其人を見ることが出来たからである。新島の朝五分間の訓話や、学生心得の朗読は、兎も角も、新島其人を見ることが予に取っては一種の感激即ちインスピレーションであった。新島は別に豪傑振らず、学者振らず、仙人でもなければ、聖者でもなく、但だ一個の平凡なる普通人であるが、然も彼の風格は、そくそくとして人を動かすものがあつた。筆者は彼の風格に接する毎に、人間としては斯ある可きものである、斯あらねばならぬものであると考へ、常に今も猶其の印象が鮮かに我が胸間に生きて居る様な心地がする。<sup>(10)</sup>

これは蘇峰の絶筆となつた『三代人物史』（以下、『人物史』と略）のなかに出てくる文章で、したがつておよそ八十年前を回顧して述べたものといふことになる。朝の礼拝の時、ただ新島ひとりになまざしをむけていた若かりし蘇峰の心像が実直に語られている。もっとも新島の風格を説明するには決して説得的ではなく感情に流れた文章である。新島の訓話とは、かくもであり、その存在感は一個の平凡な普通人にすぎない。新島の風格を説得する道具立ての按

配としては適當ではない。しかし△朝拝▽△一個の平凡な普通人▽△新島の風格▽というイメージの連鎖は蘇峰の主観において自然であり説得力をもつものと観念された。この連鎖の媒介となつていたのは、一つは蘇峰が寄せる新島への人間としての共鳴、二つはその裏付けとしての新島との交渉による実感である。

語られる人という視角が新島を考へる上で必要であるとするならば、一個の平凡な普通人がそくそくとして人を動かすという新島観の中味を検討してみる値打ちはあるのではなからうか。

## 3

蘇峰と新島との交渉は二つの時期にしほれる。その一は同志社での時期で、明治九年晩秋から十三年五月まで、蘇峰十四歳から十八歳にかけてである。その二は同志社大学設立運動に関わる時期で、明治二十一、二年、蘇峰二十六、七歳のときである。一は学生と校長、一は蘇峰が運動援助者という関係にあつた。二つのあいだの時期も旅行や書簡往復など交渉もあつたが密接なものではなかつた。ここでは二つの時期での両者の交渉要点を略述してみる。

まず蘇峰の同志社時代についてであるが、杉井六郎氏の精緻な論考「蘇峰におけるキリスト教——蘇峰における文明開化——」<sup>(11)</sup>に教えられること大であつたことをあらかじめお断りしておく。

(1)受洗。蘇峰の受洗は明治九年十二月三日京都第二公会で行なわれた<sup>(12)</sup>。牧師は新島襄である。同志社入学が同年十、十一月の交と考えられるから、入学後わずか一ヶ月余での受洗である。キリスト教についてはL・L・ジェーンズから手ほどきを受け花岡山の盟約に

も名を連ねていたほどだから、その対応はスムーズであつたらうし、入学当時の同志社には金森通倫ら熊本バンドの盟友たちもいたから、その受洗は自然な成行きと考えられる。もっともその後の経緯によって同志社退学後まもなく退会を申し出ていること、後年にはキリスト教には当初より深い関心をもっていなかったとくりかえし述べているから、入学後一ヶ月余の受洗には新たなインパクトがあつたと考えられる。それにはやはり新島の存在が大きく働いていたのではなかつたか。後年の述懐ではあるが「当時予はキリスト教に就いても、正直のところ深く研究した訳でもなく、只だ先生が信じた宗教であるから、洗礼を受けた云々」と語っている。

(2)新島の説教。蘇峰の同志社時代の日誌「俗務叢談」(明治十一年七月十一日)から新島との交渉の一端をうかがうことができる。それによれば安息日ごとに新島のもとに通い、その説教に耳を傾けていたことが知られる。説教の内容についての記述は少ないが、十六歳の蘇峰が新島との対面を望んでいた様子は十分に察知できる。またその記事は安息日の集會ばかりでなく新島への思いも伝えてくれる。八月三十日の条に「早朝ヨリ守口ヲ発シ、牧方、橋本ヲ通り過キ、淀ニテ遊泳シ、同処ニテ午餐ヲ喫シ、人力車ニテ西京停車場ニ至リ、遂ニ新島氏ニ逢遇シ姉君ニ遇ヒ、同志社ニ至ル。時ニ午後五時ナリ」とあるが、この記事はほぼ一ヶ月の岸和田キャンプを終えて帰洛したときのことを誌したものだ<sup>(17)</sup>が、遂ニ新島氏ニ逢遇シというところに蘇峰の思いが垣間みえる。その他、教会運営などを熱心に話し合っている様子もみえ、新島との関係が親密化していることも分かる。

(3)学内問題・自杖・退学。明治十二年にもなるとジャーナリストとして世に出んとする決意をもっていた蘇峰は伝道者養成を目的とした同志社の教育方針に距離をとりはじめており、同調者も加えてグループのリーダーの一人であつた。この学生間の空気は明治十三年早々に起きた学級合併問題に波及し、この問題で不平組を支援し学校当局と対峙した蘇峰は、新島の協力要請をうけたが、新島の自杖事件という結着もあつて卒業目前であつたにもかかわらず退学をするのである。ただこの経緯のなかで蘇峰はキリスト教を棄てたわけではない。明治十三年三月三十日の記述に、今後なすべき学問の一として「修身学乃チ聖書ハ寸時モ手ヨリ離ス可カラス」と、「道何ニ従フ乎」「耶蘇教是ナリ」とある。キリスト教による効用は自覚されていたのである。また新島の自杖については「此ノ処置ニ付テハ、諸人ノ尤モ注目スル処ロト雖モ、吾輩ニ於テハ尤モ此ノ英断ニ敬服スルナリ」と述べ、その中退決意の主因となつたほどに罪意識が喚起されるとともに新島再認をもたらしめた。離京の日、彼らは別れの挨拶のため新島を訪う、その場に至つても細意を促す新島をみて蘇峰は「余輩又甚タ不快ノ心ヲ生セリ」ためにけんか別れのようなかたちで辞去した彼らは、送りに来た新島の甥であり不平組の一人であつた公義と三条橋畔で会食、その支払いを新島の意をうけた公義が申し出したことで新島への思いを再びにするというシーン<sup>(18)</sup>は、その後も蘇峰のなかに強く印象づけられるのであつた。この時の「猷峯東山淡霧ニ覆ヘレ夢覚テ美人梳ニ慵キ情ノ如シ、彼ニシテ有情ナラシメハ余將如何セン。於是乎、無端旅思起矣。橋上情ヲ舎ンテ公方ト袂ヲ分ツ云々」という蘇峰の感慨に新島愛惜の情はいか

ばかりであつたらうか。<sup>(20)</sup>

つぎは同志社大学設立運動の時期である。

新島全集に収められている徳富猪一郎宛書簡は一二八通をかぞえる。うち明治二十一年分が四八、二十二年分が五十五、計一〇三で全体の八割がこの時期のものである。因みにこの二年間の新島書簡数は四三九で、猪一郎宛がもっとも多い。猪一郎宛書簡は二十一年三月から翌年十二月までひと月も欠かさずあり、ひと月で多いときは十通にもぼる。(なお新島は二十一年四月半ばから十月までと二十二年十月半ば以降は関東に滞在したから面会も多かった)。書簡内容は教会合併問題が比較的多く取り上げられているが、大半は大学設立運動に関するものであった。<sup>(21)</sup>

明治二十一年三月八日付新島宛書簡で蘇峰は、「固より微力ニハ有之候得共及ふ丈ハ御加勢申上度念願ニ御座候」と前置きして、その手始めとして『国民之友』に一文を書いたこと、「天下ノ事業」にするために井上馨、陸奥宗光、大隈重信ら中央の有力者と接触の要があること、新島の東上周旋が必要なことなどを進言・報告している。三月二十一日に主な新聞、雑誌社の代表を招いて大学設立支援を訴える集まりもたれた。「今回ハ敝社運動之件ニ付一片ならず御配慮ニ預リ大分世間ニ手広ク広告モ出来可申ト存シ、是迄ハ頭ヲ引込ミ謹慎シオリシモノガ少シク奥ノ手ヲ出シカケタルカト被思候も偏ニ貴兄ノ御勸メト御尽力ニヨル事ト深く奉鳴謝候」と新島は述べている。東京方面における運動は蘇峰によつて端緒が開かれた。そして以後の運動もまた蘇峰の働きは大きかった。新島の日記<sup>(23)</sup>

から主な事柄を拾ってみると、中央有力者との接触では陸奥宗光の送別会、大隈重信邸での会合、東日本での運動の拡大があり、とりわけ大隈邸の会合では政財界人からの義捐金提示をうける成果を挙げた。どれも蘇峰の周旋にかかるといえる。明治専門学校を同志社大学と改称するように進言したのも蘇峰である。また、「同志社通則」の起草、社員加入、将来問題への参画といった同志社との関わりも深めていった。蘇峰にとつてこういった協力・支援は同志社のためというよりも新島のためにする行為であつた。<sup>(22)</sup>

蘇峰は当初より大学設立を一国規模の事業であるとの認識に立っていた。「兎角今日ノ盛挙ヲ地方的ノモノト誤認致候人多ク残念ニ御座候何卒プロウキニシアルニあらすしてナシヨナルニ致度儀と存上候而して是れ畢竟先生御精神も右ニ相違なき儀と存し申居候」、そこで問題となるのはその理念の表明である。この面で蘇峰の働きは二つあつた。一つは『国民之友』誌上で新島の教育主義を論じたこと、二つは大学設立主意書を起草したことである。それはともに新島を公人として全国区に押し出すことであつた。

『国民之友』ではまず「福沢論吉君と新島襄君」を書き、そこで「二君ハ実ニ泰西文明の二大原素を我か邦に輸入せんとするの案内者にして、泰西表面の文明たる物質的の智識ハ、福沢君に依つて案内せられ、泰西裏面の文明たる精神的の道德ハ新島君に於て案内せらる、而して前者ハ既に福沢君の案内に依つて我か邦に來れり、後者ハ新島君の案内に依つて將に來らんとす」と述べ、これからの時代は新島の教育主義が主役となると論じた。つぎに「人民の手に依

りて成立する大学」を書き、そこで新日本青年の教育は一の官立大学だけでは不満足であること、これからは物質文明摂取から「道德的建設の時代」へと進まなければならないこと、したがって「我邦の欠乏なる者へ、実に一国精神元氣の上に在り、我邦の需用なるものへ実に道德品行の上に在り、即ち器械的の知識に満足するに在らずして、其器械的の知識を運用する所の精神如何んに在ること」、つまり「一国の良心」や「一国の品位」が求められていること、この諸要件を充足できるのは新島襄の同志社大学であること、と論じた。<sup>27</sup> ついで同志社での演説「同志社学生に告ぐ」を掲載した。そこではいまは「物質的の文明」から「精神的の文明」へとすすむ時であるから精神的研鑽に励む国民が待望されている、そしてこういう人物を育成することが「我が新島襄先生が二十年來の宿志」であると論じた。<sup>28</sup> 以上のようにどれも物質文明から精神文明を摂取する時代へとすすむ状況での新島の教育主義は一層重要さを増すであろうことを論じたものであった。これらの論は蘇峰の新島理解の一面を語るものであるとともに蘇峰自身の主張の表明でもあった。

大学の設立主意書「同志社大学設立の旨意」（以下、「旨意」と略）は、新島から材料の提供をうけて蘇峰が起草し、その後両者間往復の上で成稿し、二十一年十一月に新島の名で発表された。「旨意」はそれ以前に発表されていた「同志社大校設立旨趣」と「明治専門学校設立旨趣」とを踏まえて、それに新たな材料を加えて作成された。二つの「旨趣」と比べて論旨に大きな差異はないが、いかなる人物養成を目的とするのかを明瞭に提示している点は、「旨

意」の著しい特徴である。

勿論此の大学よりしては、或は政党に加入する者もあらん、或は農工商の業に従事する者もあらん、或は宗教の爲めに働く者もあらん、或は学者となる者もあらん、官吏となる者もあらん、其成就する所の者は、千差万別にして敢て予じめ定む可からずと雖も、是等の人々ハ皆な一国の精神となり、元氣となり、柱石となる人々にして、是等の人々を養成するへ、実に同志社大学を設立する所以の目的なりとす

一国を維持するは、決して二三英雄の力に非ず、実に一国を組織する教育あり、智識あり、品行ある人民の力に拠らざる可からず、是等の人民ハ一国の良心とも謂ふ可き人々なり、而して吾人ハ即ち此の一国の良心とも謂ふ可き人々を養成せんと欲す。<sup>29</sup>

この一節は「旨意」の主張の中心論点の一である。一国の精神、元氣、一国の良心という言葉、多様な人材の養成、品行ある人民という概念、文体上の調子などどれも『国民之友』での新島論に類似している。この文章を蘇峰の新島論の一つとみるのはあながち無謀とはいえないだろう。「旨意」は新島との合作であったから、蘇峰はその新島理解にますます確信を深めたはずである。

猪一郎宛新島書簡で大学設立運動のほかにしばしば言及されていたのは教会合併問題であった。新島は合併反対の立場をとったが、周辺の人たちの多くが合併推進に動いたため相当に悩んだ。蘇峰はこの問題でも徹底して新島に付いた。教会人ではなかった蘇峰であったが新島の意向を重んじて工作に動きもした。大学設立運動や教

会合併問題を通して新島から「小生も時々貴兄を思出し時々心胆を吐露シテ諸事御協議仕度候、小生ヲ知ル者ハ天下只猪一郎君アルノミ、小生モ一方ニハ心細ク存候得共、君一人アルヲ以テ亦心大ク罷在候<sup>30)</sup>」と言われたときの蘇峰の思ひはいかばかりであつたらうか。

以上、二つの時期における蘇峰と新島との交渉要点を述べた。第一の時期は学生と校長という関係もあつて蘇峰はながめる立場にあり、その視角は多くの場合キリスト教を通してであつた。そこでは「基督者新島」でも言うべき像がむすばれる。蘇峰はキリスト教をもつて自己の精神形成を行なつたが、その指標に「基督者新島」があつた。ただその「基督者新島」は伝道者あるいは教育者として何か特別な存在感をもつた異才ではなく、キリスト教によつて自己の内面を持している誠実な人物のイメージであつた。蘇峰はそこに強い印象をうけた。蘇峰が同志社を中退し東上後に教会から離れたのは「基督者新島」が確乎たる基準としてあり、新島を欠いたキリスト教にはもはや興味をもてなかつたのである。<sup>31)</sup>別の言い方をすれば、蘇峰にとつてキリスト教は新島において完結していたということである。蘇峰の新島像形成においてそこには二つの意味があつたであらう。一つは「基督者新島」と自己とがはつきりとした格差をもつと自覚したこと、二つにはそれ故に、「基督者新島」への信頼が絶対的となつたことである。同志社生活によつて実感した「基督者新島」はキリスト教との関連を希薄化してゆきつつ人間性の像としてふくらんでゆくのである。

第一の時期が自ずから感得した像であるとするなら第二の時期は

具体的な問題での関係ということもあつて、それは必要に応じて作られた像という感がある。新島を中央の舞台にのせるには基督者よりも基督教主義者として、西京同志社の創始者よりも新日本青年の教育者として評する必要があつた。そこでは「精神教育者新島」でも言うべき像がむすばれる。「精神教育者新島」の内実はたしかに蘇峰の主張と連関していたが、しかし新島との緊密な交渉によつて成つたものであるから単なるデフォルメではなかつた。「基督者新島」が蘇峰の主観だとすれば、「精神教育者新島」はその客観化といえるであらうか。しかし一国の精神、品行ある人民、一国の良心などという言葉の内実に「基督者新島」があつたわけ、この二つの像は重層をなして蘇峰の新島像を構成していたのである。

## 4

蘇峰が新島について語つた文章は少なくない。間接的に言及したものを加えれば相当な数になると思われる。そうしたなかにあつて同志社創立八十周年記念の一として同志社が刊行した徳富猪一郎著『新島襄先生』は、蘇峰が昭和三十年までに新島について語つた文章四十八編が収められている。もちろんこの書がその全てを網羅しているわけではないし、昭和三十年に連載中であつた『人物史』のなかの新島伝はもつともまとまつたものであるから欠かすことができないが、その主要なものは採録されている。この書は内容別の体裁をとつているが、いまそれを年代順に排列し、通し番号を付してみると次表のようになる。

徳富猪一郎 『新島襄先生』

(森中章光編 同志社刊 昭和三十年十一月)

番号	発表年月日	題目	掲載誌	備考
1	明治21・3・2	福沢諭吉君と新島襄君	国民之友 第17号	
2	21・12・7	同志社学生に告ぐ	〃 第35号	21・11・15 同志社での演説大要
3	23・1・27	△先生在天の靈に告ぐ△	国民之友 第72号	告別式当日の弔電
4	23・2・3	一月二十三日午後二時二十分	〃 第79号	
5	23・4・13	新島先生没後の同志社	新島先生言行録 (石塚正治編 福音社)	23・3・30 同志社での演説大要
6	24・9	新島先生言行録に題す	国民新聞 第92号 附録	
7	26・1・22	新島先生を懐ふ	家庭雑誌 第5号	
8	26・1	新島先生聖書の記	第二天然と人 (徳富著 民友社)	38・1・29 記
9	40・4	先輩の遺韻	〃	39・4・8 記
10	〃	新島先生の故宅	〃	〃
11	〃	若王寺山に詣づ	〃	40・1・23 記
12	〃	新島先生十七週年	実業之日本 秋季増刊号	
13	42・10・10	余は新島先生に於て如斯克己を見たり	同志社時報 第88号	45・5・20 同志社大学開校式演説大要
14	45・5・20	△同志社大学設立の顛末△	大正の青年と帝国の前途 (徳富著 民友社)	
15	大正5・11	新島襄	烟霞勝遊記 下巻 (徳富著 民友社)	4・11・11 記
16	13・9	南禅寺より若王子	〃	10・5・23 記
17	〃	午前の墓参	木戸松菊先生 (徳富著 民友社)	3・5・27 木戸孝允に関する講演の一節
18	昭和3・12	公と新島襄先生	人間界と自然界 (徳富著 民友社)	2・1・23 記
19	4・11	新島先生三十八年忌	〃	4・5・8 記
20	〃	新島先生の書翰		

番号	発表年月日	題目	掲載誌	備考
21	5・10	新島襄先生	書窓雜記(徳富著 民友社)	5・1・24記
22	6・9	勝海舟と新島襄	卓上小話(徳富著 民友社)	
23	10・5	新島先生と唐宋詩醇	四時佳興(徳富著 民友社)	
24	10・9	△新島先生と著者▽	蘇峰自伝(徳富著 中央公論社)	
25	〃	△少年の客気▽	〃	
26	11・4	新島先生と日本精神	史論新集(徳富著 民友社)	10・10 同志社創立六十周年記念講演
27	12・1・23	精神日本の先駆者	毎日新聞 夕刊	
28	12・7	書簡の往復に就いて	現代女性訓	
29	13・3	同志社大学と井上	我が交遊録(徳富著 中央公論社)	
30	〃	同志社募金と井上、大隈	〃	
31	〃	新島先生を門前払ひす	〃	
32	〃	陸奥と同志社	〃	
33	〃	鹿鳴館会合の小話	〃	
34	〃	勝先生と新島先生	〃	
35	〃	新島襄先生	〃	
36	15・1・21	新島先生の追憶一斑	中外日報	15・10・13 東京日比谷公会堂での講演
37	16・7	裏から見た新島先生	同志社講演集 第6輯 新体制と新島先生	
38	16・11・25	△永眠の地記念碑除幕の式辞▽		
39	16・11・26	日本の文教と先生	蘇峰会誌	
40	17・3・10	三人の師	中外日報	
41	17・6	書簡の人新島先生	新島先生書簡集 (森中章光編 同志社)	新島先生誕生地記念碑寄贈の辞
42	19・11	新島襄先生	蘇翁感銘録(徳富著 宝雲舎)	

48	29・5・11	新島先生を懐ふ		テレビ放送要領原稿
47	29・1・3	京都の文化と新島襄	京都新聞	
46	28・11・28	新島先生愛用聖書の寄贈について		同志社創立第78回記念式典
45	//	新島先生を語る		同志社での講演筆記
44	27・5・21	先生の奉仕精神		熱海晩晴艸堂で口授・森中章光筆記
43	昭和26・3	△新島先生は如何なる人であったか△		

(注記)

- 1 発表年月日は、掲載誌のある場合は掲載誌の発行年月をとり、発表の日付が異なるときはその旨、備考欄に記した。  
 2 題目は発表時のもので、△▽は上掲『新島襄先生』よりとったものを示す。

まず表全体からみえることを指摘してみると、1・2以外は新島歿後のものであること、明治、大正、昭和と大きな間断もなく語りつづけられていること(大正期は少ないが)、題目からだけでも分かるように逸話あるいは体験談的内容のことが多いこと、短かい文章が多いこと、演説や記念講演でしゃべったものが少なくないこと、といったことである。前掲『新島襄先生』の構成では、第一篇26、第二篇37・41・43、第三篇12・13・20・21・27・44・48、第四篇1・2・8・9・14・15・39・47、第五篇24・18・22・34・29・30・32、第六篇35・42・46、第七篇4・5・3・7・11・10・17・19・36・40・6・16・23・25・28・31・33・38・45となっている。第一〜三篇が新島精神とはどのようなものであったかを、第四篇は新島の教育主義を、第五篇は同時代人との関係を、第六篇は交渉によつ

てみた人間新島を、第七篇は記念・紀行・逸話などを述べたものをそれぞれに類別しているといえようか。本格的な新島論といったものはないが、26のみが第一篇に配されていることからこの文章がよりまとまったものと見なされていたと考えられる。しかし各篇の内容のまとまりは明瞭なものでなく一応の目安といったほどのものである。年代順に排列してもこれといった特徴を見い出せないが、あえて言うなら『自伝』が一つの画期となり、それ以後は自分の人生という視野のなかで新島を位置づけようとする傾向が顕著になるということはいえるだろう。

断片的な随想や記念講演の類が多く本格的な新島論(未完ではあるが『人物史』の新島伝がそれにあたるが)がなく、全体にこれといった特徴を見い出せないのは、その新島像が蘇峰の内面にあつて

血肉化していたために、それをあえて客観視する必要を覚えなかつたからであろう。それに加えて蘇峰には「其の言を聞く、必らずしも赫々たらず、其の行を察す、必らずしも磊々たらず、就て之に接すれハ、人をして覚へず春風の中に坐了せしむるのみ、而して之に接する愈久ふして其の至誠神明を欺かず、其の精神天地を撼さんとするもの、冥々の裡自から衷に感通し来るを見るのみ、先生豈に言行人の人ならん哉」という新島観があつた。蘇峰にあって新島は同志社の草創期から永眠まで交渉体験の人であり、かつその人物は言行の人でなく接すること感受させられる人であつたから、折にふれて追想することはあつても論としてまとめ上げることはなかつたのである。したがつてその新島像は批評的でなく感想的であり、多分に蘇峰の主観によつてふくらまされたものである。ただしそれが交渉による深い実感に裏打ちされたものであることは忘れてはならない。

蘇峰が新島を回想するとき幾度も語つたのは初対面と退学の場面である。初対面のことは前表では26・35・37・40・42に述べられてゐるが、その印象を最初に述べてゐるのは『自伝』においてであつた。

先生は一見した処、如何にも親切で温恭で、立派な人格者らしく思はれた。別に特徴と云ふ程の事はなかつたが、眉の上に大なる傷痕があつた。先生は西洋流のナイトガウンを著、房のついた帯をしめてゐた。何やら小なるストープがあつたと覚えてゐる。先生は種々予に是迄の成行きを訊ねた。而して薩摩芋にて作りたる羊羹幾片れか御馳走し、当時初めて流行しつゝあつた紀州メネ

ルのシャツ二個を恵まれた。それは予が夏仕度にて国を出て以來、殆ど着物には頓著しなかつた。定めて予が寒さうな風をしてゐたのを見て、預め予に与ふべく準備をして置れたものであらう。此の如くして予と新島先生との長き間の交際は初まつた。<sup>(34)</sup>

ここには保護者に無断で飛び出してきた十四歳の若者がアメリカ帰りの温和な紳士から丁寧な応対を受けたことへの感慨はある。この初対面が蘇峰にとつていかに印象的であつたか、あるいは両者の關係を決定づけるほどであつたかはくりかえし語つてゐることから分かる。26では「余り話をしない人であつたが、すつかり私は先生に惚れ込んでしまつた。……始めて人間らしい人間と云ふものに会つたと云ふ氣持がして、此処に自分は我が先生となるべき人を見出したと云ふ風に感じた<sup>(35)</sup>」とあり、35では「予は最初の会見で、心から新島先生に感服した。斯心は爾後深きをこそ加へたが、決して今日まで渝ることがない<sup>(36)</sup>」と、37では「何となく先生に魅せられて、如何にも好い方である、この人こそ自分の先生であるといふやうな感じをしたのであります<sup>(37)</sup>」と、42では「予はその最初の面会において、なるほどこの人は予の先生たる値打があると考へた。その初一念が、一生子の生涯を支配してゐた<sup>(38)</sup>」と、さらに『人物史』でも「但だ予は一見慈に初めて予が善き先生を見出したと云ふ感じをした。爾來十四歳の青年が認めたる新島襄は、筆者九十三歳の今日迄、一点一画も変ることとはなかつた<sup>(39)</sup>」と述べてゐる。どれもほとんど同じ感想である。蘇峰はこの時、先生とよびうる人物——それはまた人間らしい人間である——を見出したと直感した。新島は最初から先生であり蘇峰の主観によつて見い出された先生であつた。

そしてその初、念は蘇峰の一生を通して、一点、一画も変ることとはなかつたのである。ずいぶん時間のたつた回想であるから固定化しているであろうが、最初の直感<sup>(4)</sup>は長き間の交際においても裏切られることはなかつたのである。したがってこの初対面の印象は蘇峰の新島の像の原基であつた。しかし蘇峰を喚起させた新島の何が具体的に述べられているわけではない。右の文章中にあるのは蒼白い顔色、真黒な髪、豊かで立派な顔立ち、温和な物腰・態度、言葉少ない人、という新島の相貌にすぎない。やはりそれはそういう言葉でしか伝えることのできない。△基督者新島▽の像であつた。

△基督者新島▽像は言論より人柄であつたから、たとえば新島の聖書講義について「その講義中には外の事を考へてゐたから、その講義が何事であつたかは、実は何等の印象も止めてゐない」と言つたり、「先生からは何を教へられたかといへば、別にはつきりこれといふ事はない」と言うことができるのに対し、「先生は毎日几帳面に、恰も時計の如く、自宅から同志社に出掛けられた。而して何時もその教授せらるる書籍などを、黒い革袋に入れ、それを斜めに肩から吊つてをられた」といふなげない通学風景や「夜来先生を辞して還る毎に、必らず先生のランプを手にして玄関に佇立し、門を出つるを照らさるるはなかりき。是れ総ての生徒に対して然りし也。」<sup>(13)</sup>という生徒の応接などの日常の居止が強く印象されるのである。

蘇峰はこの表面篤実な人柄の内面に情熱と意志の力を見る。20に「過日同志社同人相会し、談偶ま新島先生に及ぶ。一人曰く、先生は情熱の人なり、その感情の猛烈、驚く可きものあり。一人又曰

く、その猛烈なる感情を抑制する、先生の意志の力に至りては、更に驚嘆の外なしと。何れも能く先生を知る者の言だ」とあるが、同じ意味のことは13・37・41・48でも言われている。そしてこの内面の働きの契機となつたのが「幕末の時代精神」と「アメリカのピューリタニズム」<sup>(15)</sup>だとする。15では「彼は維新前、憂国の志士の心腸に、米国新英州の醇粹、無垢なる清教徒的の血液を注入せられたり」と、37では「一方は所謂ニューイングランド精神、……先生はその中で成長して来られた人である。それで先生は、ヒューマンズムの人であると言へませう。また一方では物事に拘泥せないとこの維新の志士の気分があつた」と、さらに『人物史』では「惟ふに新島の教育家としての資格中尤も卓越したるは、恐らくは此の多量なる情熱が、日本武士道と、新英州の清教徒精神とによりて、洗練せられ、浄化せられ、醇化せられたる一点であらう」と述べられている。しかしてこの二つの契機は、前者が「一生国家のために働くべきものと云ふこと」つまり愛国主義に、後者が「個人の靈魂は全世界より重いと云ふやうなこと」つまり人道主義に結びつけられる。この愛国主義と人道主義は△精神教育者新島▽の要素として胚胎していたものであるが、当初はどちらかといへば後者の方にウェイトがかかつていたが、徐々に前者が強く言い出されるようになる。

愛国主義者新島を典型的に述べているのは15の文章である。そこで蘇峰はそのキリスト教主義を「徒らに天を敬し、人を愛し、我が靈魂の不朽を要むるに止まらず。己を捨て、公に殉ずるの精神を以て、天下の大事に膺るの青年を、陶冶せんと欲した云々」と、その

自由教育を「寧ろ個人の自得教育を意味したり。……彼や更らに一層を進みて、己を捨て、世に貢献せすんは止まざりし也」とし、新島の教育主義を「献身教育、奉公教育、殉道教育」であつたと論じている。<sup>(50)</sup> ここには時代の愛国者という鑄型に新島をはめこもうとする蘇峰の意図をみることができる。その新島の造形はどうしても薄つべらな感をぬぐいがたい。しかし実のところこういう文章は例外的なのである。たしかに蘇峰は幾度となく愛国者新島をくりかえしている。それは12・21・26・35・42の文章に、また『自伝』や『人物史』にもその言葉はみえる。愛国者という言葉だけなら形容一般として受けとれるのだが、新島に対しての愛国者という形容にはなにか特別の意味をこめているような使い方なのである。たとえれば12では「先生の心血の一半は、学校の為めに、他の一半は、教会の為に洒けり。然も学校も、教会も、国家を濟度せんか為めのみ。記者は先生に於て、始めて真の愛国者を見る。」<sup>(51)</sup>とある。国家の濟度が愛国の行為とすれば一応それでよいのだが、そこに始めて、真のという言葉を付すのはなにか含意が認められる。そう考えてみて他の用例をみると、21は「予は未だ先生の如く、我が日本國を愛する者を見た例が無い」と言い、26は「先生は本當の愛国者だ」と、『人物史』は「純粹なる愛国者」と言っている。

愛国者という言葉は歴史の波をかぶっている。ことに昭和十年代には乱用されさえしたし、蘇峰も多用した言葉であつただろう。ただ明治から戦後にまで愛国者新島を言いつづけ、その際真のとか本當のとか純粹なるといった形容を付したのは、たんなる時代便乗のことではなく、そこに新島の本質を見出し出したからではなからう

か。そこでその内実を知るにはむしろ戦後の発言を聞いた方が分りよいだろう。その意味で44の文章が注意される。蘇峰はそこで日本の歴史は「取る」歴史、つまり外国のものを取り入れ模倣し相手との競争に打ち勝とうとした歴史であつたという。明治の教育者でその取る教育を代表したのは福沢諭吉であつたとして、

ところが、こゝに特異の人がありました。その人は取ることは他の人がやる、自分だけは寧ろ与えることを以て、教育の方針としてしようとしたのである。其人が即ち新島先生であつたのであります。新島先生は一切の勧誘を退け、じつとして居ても、いわゆる成功者になり得た人なのですが、それが、すべての事に眼をつぶつて、何が故に同志社を苦心して建てられたかといふに、(略)日本といふ国はとにかく人物をつくらなければならない。人物といふのは即ち精神ある人物である。故にこの精神を培養しなければならん。そしてこの精神の最も根本は宗教にある。されば宗教を根拠にした精神を有する人物をつくらなければならないといふので、先生はこゝに此の同志社を創られたわけであります。先生の教育は人間の教育であり、その教育は精神の教育であり、その精神の教育といふものは、即ち人間は神に対しても人に対しても、或はまた動物に対してさえも、奉仕するといふことを第一にしななければならないといふことを教えられたのであります。(略)此の奉仕は、即ち人として国のため、世のため、あらゆるものゝために尽すといふことを意味し、先生はこれを教えられたのであります。といつて先生は単に言論や文筆の上で教えられたのではありません。先生は即ち実行を以て教えられたのであります。身自

らの生活を以て教えられたので、先生にありましては、実にその全心身が奉仕そのものであつたといふ風に、私は考へて居るものであります。<sup>55</sup>

と新島を対置して論じた。蘇峰はとくに福沢と対照させて精神の自立を新島にみえていた。精神は物質同様に自立性をもつが、精神の自立は機械的でなく人間的である。また個の主体認識自体は同じであっても自尊ではなく奉仕である。新島は精神の行為者であり精神の教育者であつた。与えること、奉仕することは精神の行為として始めて可能となり、その実践は精神の自律があつてはじめて可能となる。新島は言論や文筆ばかりでなく実行、身自らの生活でもってそれを体現した——この蘇峰の新島論に、愛国者も八基督者新島も八精神教育者新島も、そして一個の平凡な普通人がそくそくとして人を動かすという実感も溶けこんでいたのである。

#### 注

- (1) 新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』（同朋舎出版）は現在までに教育、宗教、書簡Ⅰ、同Ⅱ、日記・紀行、英文書簡、生涯と手紙（A・S・ハーディ著）の各編が刊行されている。
- (2) J. D. Davis, Joseph Hardy Neesima (1894) 北垣宗治訳（小学館 昭和五十二年）
- (3) 同前 五一頁。北垣氏はこの高官を森有礼か田中不二麿ではないかと推測されている。
- (4) 同前 三頁。
- (5) 「一月二十三日午後二時二十分」（『国民之友』第七十二号

明治二十三年二月三日発兌）

- (6) 徳富猪一郎著『烟霞勝遊記』下巻（民友社 大正十三年）一〇四頁。
- (7) 徳富猪一郎著『人間界と自然界』（民友社 昭和四年）三二二—一三頁。
- (8) 徳富猪一郎著『蘇峰自伝』（中央公論社 昭和十年）二二—一三頁。
- (9) 徳富猪一郎著『蘇翁感銘録』（宝雲舎 昭和十九年）五六頁。
- (10) 徳富蘇峰著『三代人物史』（読売新聞社 昭和四十六年）五一七—一八頁。
- (11) 杉井六郎著『徳富蘇峰の研究』（法政大学出版 一九七七年）第二章。
- (12) 「第二公会録事」（前掲『新島襄全集』第二巻）
- (13) 早川喜代次著『徳富蘇峰』（徳富蘇峰伝記編集会 昭和四十三年）によれば十月二十日夕京都に入ったとあるが典拠が示されておらずはつきりしない。
- (14) 「第二公会録事」によれば蘇峰の退会除名は明治十三年九月二十四日である。
- (15) 徳富猪一郎著『我が交遊録』（中央公論社 昭和十三年）三〇八頁。
- (16) 「俗務叢談」（花立三郎・杉井六郎・和田守編『同志社大江義塾 徳富蘇峰資料集』三一書房 一九七八年 三八—四一頁）。
- (17) 同前 三八頁。
- (18) 「処々秋光」（同前 一〇三頁）。

- (19) 同前 一〇四頁。
- (20) 「所見所聞」(同前 一一八頁)。
- (21) 同志社社史史料室蔵「新島先生へ宛てたる徳富蘇峯翁書簡」  
写
- (22) 明治二十一年三月二十五日付徳富猪一郎宛新島襄書簡(前掲『新島襄全集』第三卷 五四三頁)。
- (23) 「出遊記」・「漫遊記」・「同志社大学設立募金日誌」(前掲『新島襄全集』第五卷)を参照。
- (24) 蘇峰は『我が交遊録』のなかで大学設立運動にふれて「正直のところ、予は別段同志社そのものに対して愛着を持たなかつたが、同志社に力を竭すことが、先生に対する恩を報ずる所以であると考へ、その為に幕地にその為に微力を效したのである」(三三二頁)と述べている。
- (25) 前掲「新島先生へ宛てたる徳富蘇峯翁書簡」写
- (26) 「福沢諭吉君と新島襄君」(『国民之友』第十七号 明治二十一年三月二日発兌)
- (27) 「人民の手に依りて成立する大学」(同前第十九号 明治二十一年四月六日発兌)
- (28) 「同志社学生に告ぐ」(同前第三十五号 明治二十一年十二月七日発兌)
- (29) 「同志社大学設立の旨意」(前掲『新島襄全集』第一巻 一四〇頁)。
- (30) 明治二十二年六月二日付徳富猪一郎宛書簡(同前第四巻 一四六頁)。

- (31) 後年の回顧ではあるが、蘇峰は「裏から見た新島先生」のなかで「私は東京に来て、さうして先生の言ふ通りにクリスチャンは止めない、教会には行くといふことであるので、或る牧師を訪ねて色々聴いてみると、どうも先生とは勝手が違ふ。私が耶蘇教を信じたのは、耶蘇教を信じたのではなく、新島先生を信じたのだと東京に来て始めて覚つた。新島先生を除外した耶蘇教は、俺にはどうしても耐へられない、まア止した方が直截簡明でよくあるまいか」(同志社講演集第六輯『新島襄先生五十周年記念講演集 新体制と新島先生』五六―七頁)と述べている。
- (32) 蘇峰自身同書の前がきで「要するに、本書に掲げたものは、予が先生について語りたるすべてではなく、其の一部分と見るが適当であろうと思う」と述べている。一例をあげれば「還曆を迎ふる一新聞記者の回顧」などがそうである。
- (33) 「新島先生言行録に題す」(石塚正治編『新島先生言行録』福音社 明治二十四年 一一二頁)。
- (34) 『自伝』七八―九頁。
- (35) 徳富猪一郎著『史論新集』(民友社 昭和十一年)三四〇頁。
- (36) 前掲「我が交遊録」三〇〇頁。
- (37) 前掲「裏から見た新島先生」三八頁。
- (38) 前掲『蘇翁感銘録』六一頁。
- (39) 『人物史』五一―六頁。
- (40) 『自伝』九三頁。
- (41) 前掲『蘇翁感銘録』七四頁。

- (42) 前掲『我が交遊録』三〇六頁。
- (43) 徳富猪一郎著『第二天然と人』(民友社 明治四十年)三四二—四三頁。
- (44) 前掲『人間界と自然界』四一四頁。
- (45) 「新島先生は如何なる人であつたか」(徳富猪一郎著『新島襄先生』七四頁)。
- (46) 徳富猪一郎著『大正の青年と帝国の前途』(民友社 大正五年 三五—頁)。
- (47) 前掲『新体制と新島先生』四四頁。
- (48) 『人物史』四三九頁。
- (49) 前掲『史論新集』三三〇頁。
- (50) 前掲『大正の青年と帝国の前途』三五〇—五三頁。
- (51) 前掲『第二天然と人』一二五頁。
- (52) 徳富猪一郎著『書窓雜記』(民友社 昭和五年)三六一頁。
- (53) 前掲『史論新集』三五—頁。
- (54) 『人物史』四〇—頁。
- (55) 「先生の奉仕精神」(前掲『新島襄先生』一二七—二八頁)。  
 (同志社大学助教授)